

書肆 高山本店と 神田古書センターの歴史

高山 肇会員

本日はいい機会を頂いてありがたく思っています。奇しくも昨日の建国記念日が「神田古書センター」の開店の記念日として、後半のところで古書センター47年の歴史についてもお話をさせていただきます。

さて、今NHKの大河ドラマ「べらぼう」が放送されています。あまり視聴率は良くないようですが、現在の出版業、そして本屋のビジネスの歴史につながる事と思いを注目しています。高山本店の屋号の頭についている「書肆」という言葉もこの頃盛んに使われる様になり、古書店、書店だけではなく出版業等、広く本のビジネスに関わる業態の総称だった様です。高山本店の創業は福岡の久留米で、明治以前まで弓の修理や販売を営んでいたと聞いてきました。初代の高山清次郎が明治になり弓の商売から古書に変えて今までの顧客だったお侍さんを相手に売り買いを始めたのが明治8年だったと伝わっています。

その後、清次郎のつれあいが明治19年に27歳の若さで他界した事を機に久留米に見切りをつけて明治27年から28年あたりに神保町に、2代目の高山清太郎を連れて上京してきます。その頃の神保町は、明治25年に神田で大火事が発生し、中央大学や三省堂書店も含め、駿河台、神保町の大部分の店舗が被害にあいます。

(4,000軒焼失)

その後の復興の機会に高山清次郎、清太郎親子は店を持ったようで、明治36年の神田古書店地図に初めて高山本店が載るようになりました。

2代目高山清太郎の時代になり、当時は大学の教科書を独自の方法で仕入れ、当時神保町の町にあふれかえっていた大学生に売れまくって、大きな商売ができたようです。2代目の清太郎とつれあいの間には、子供は娘が一人しか生まれず、養子を取るようになりました。いろいろと評判を聞いて探しているうち、当時の八木書店の店員をしていた富三男を見つけ、また、書店の業界の体育大会の短距離走で優勝したことを機に、八木書店の現在の壮一会長のお父様の八木敏夫さんと掛け合って高山家に養子に来てもらいました。

2代目の高山清太郎は自分が中学生の時に他界しましたが、豪放磊落な人柄で、業界の役員もやっていたおかげで、79才で亡くなった葬儀には、会場となった高山本店に、驚く位の参列者が来ました。

そして3代目高山富三男の時代です。現在の高山本店の骨格は高山富三男が作ってきました。今に続く武道書や能楽関係書の取扱いは、高山富三男が作り上げてきました。特に歴史作家の先生方に気に入られ、柴田錬三郎さん、大岡昇平さん、瀬戸内晴美さん。そして司馬遼太郎さんのご自宅には、父親と納品に出かけて行きました。特に司馬先生には可愛がっていただき、「街道をゆく 神田界限」には店のことを書いていただき、今でも時折、司馬先生のファンが訪ねて見えます。高山本店の歴史の中でも一番輝いた時代でした。

さて、私の時代に入ります。神保町の古書店街は太平洋戦争では空襲にあわずに済んだおかげで、昭和40年代、私の店も関東大震災の復興で建てた5軒長屋でした。折しも、昭和46年から始まった都営新宿線の工事では、店の軒先まで掘削の工事が入り安普請の木造店舗は倒壊寸前まで追い詰められ5軒長屋の古本屋で相談し始めましたが、結果的には北澤書店との共同ビルを建設する事になりました。当会の会員の今本義子さんのお父様の北澤龍太郎さんとは毎日のようにゼネコンの五洋建設の設計士と会合を持って話を詰めていきました。

当初五洋建設は1階を店舗、2階から9階は事務所とセオリー通りの提案をしてきましたが、自分の考えは神保町の街はこれからも古書店がリードしなくては発展しないと思い、ビルの名称を「神田古書センター」そして名前の通り大部分のフロアを古書店に入ってもらいました。一緒にこの計画を進めてきた北澤龍太郎さんから大きな賛意を頂いたのが励みになりました。

神保町には約120軒の古書店がそれぞれの専門性を持って営業しています。古書センターも地方の古書店も含め、現在も個性的な古書店に入ってもらっています。

もう一軒、エポックメイキングなテナントさんが「ボンディ」です。前から考えていた英国風のカレー店にテナントに入ってもらおうと思い自分がロンドンで食べ歩いたカレー店のイメージに近いカレーを探して、その当時、高島平で営業していた「インディラ」というカレー店を人づてに聞いて訪ね、これならいけると思い、何度も説得に足を運びました。オーナーの村田さんも男気ある人で「自分も高山君にかける」と言って頂いて、立派なお店をオープンできました。今「ボンディ」は古書センターの中で一番の繁盛店です。土日は一日中50名を超す行列ができています。そしてこの「ボンディ」の成功を機に、神保町には200軒を超えるカレーのお店が出店しています。

今、自分は千代田区商店街連合会の会長を仰せつかっています。千代田区だけで25を超える再開発が進んでいます。どうやって古くから続けているお店の良さを残しながら街を更新していくかが大きな課題だと思っています。行政の、そしてデベロッパーの責任もあるでしょう。同時にお店を続けていく熱意が必要だと思っています。神保町の街づくりが古書店街の存続も含め試されていると思っています。ご清聴、ありがとうございました。



高山 君江様(お母様)と高山 肇会員